

この人に聞く

沖縄が人生を決めた 上地源光さんのお話



プロフィール

1947年 沖縄県に生まれる
1971年 新大理学部数学科卒
1973年～2009年 新潟市教職員組合 書記
2012年～ 年金者組合県本部書記長
2002年～2014年 新潟沖縄県人会会長

編 集 部

生い立ち（高校まで）

家族のこと

沖縄県中頭郡読谷村字楚辺の貧しい農家の次男坊であつた私の父源吉は、1934年、18歳の時テニアン島に渡つた。5年後には顔も知らない母のツルが、嫁として42年に兄恒雄が生まれ、2人の姉幸子、早苗が生まれた。

太平洋戦争の敗色が濃くなり、サイパンが陥落、やがてテニアン島も陥落した。テニアン島は原爆を投下したエノラ・ゲイの出撃基地になつた。家族は、戦火を逃れてテニアン島のすぐ南にあるアギガン島へ渡つた。絶壁の中にある洞窟で45年8月まで身を潜めていた。長女幸子は餓死した。

米軍に投降した避難民たちは戦後まもなく沖縄に送り返された。家族は沖縄本島の泡瀬キャンプに收容された。その後、脱走して石川キャンプに移つた。その間に次女早苗も栄養失調で亡くなつた。

1947年3月、読谷村の住民たちは收容所から解放され、父母と兄は楚辺へ帰還した。帰ると、集落や畑があつた場所は、金網に囲まれ、広大な米軍基地と

なっており、立ち入ることができなかった。家があった場所は軍需物資の集積場になっていた。その年の11月に私は生まれた。

元の集落へ戻れない住民は金網の外にへばりつくようにバラックを建て、新しい生活を始めることになった。生活のための仕事は、奪われた土地の上に米軍基地を建設することであった。

50年になるとアメリカは恒久的な基地建设に本格的に着手し、沖縄のいたるところで新たな土地取り上げと基地建设を進めた。家、屋敷や耕作地を失った人たちは基地建设労働に従事するほかなかった。

土地を奪われた上、その土地の上に米軍基地を建設する屈辱を味わされた人たちに反発が広がった。そこでアメリカは戦前と同じように移民政策で対応した。ブラジル、アルゼンチン、ボリビア等への移民、そして、石垣島、西表島への開拓移住であった。

父源吉は、石垣島への移住を決意し、1951年8月、石垣島の米原へ入植した。私が3歳半の時である。開拓は困難を極め、マラリアで大勢の人たちが犠牲になった。父の兄弟では五男がボリビアに、三女がアルゼンチンに移民した。

石垣市立富野小学校

小学校の1年から4年生の1学期まで、石垣市立富野小学校で学んだ。石垣島の於茂登岳の北側に位置する僻地で、小学校2クラス、中学校1クラスの複式学級であった。

教師は校長夫妻と若い女性の教師(名前を思い出せない)が一人の3名であった。太田正和校長は孔子や孟子の逸話(儒教の教え)を語る先生だった。先生は「源光は頭のよい子だ」と言っており、いつも頭をなでた。

3年生の時、学校にオルガンの寄贈があった。女性教師の演奏で初めて聞くその音色に感動した。

4年生の1学期、「二四の瞳」の中の、子どもたちがおなご先生の家がある一本松まで、泣きべそをかきながら会いに行く場面を、女性教師が思いを込めて読んで聞かせたことが記憶に残っている。

読谷村立古堅小学校へ転校

私は10歳の57年7月に伯母(父の姉)のもとへ養子に行くことになり、読谷村の楚辺に戻った。

担任の大湾昌子先生には、幾度も叱られた。先生の罰は、太ももの内側をきつく抓ることだった。何度も青あざができたことを覚えている。先生が嫌いだった。

6年生の担任は与儀ナエ先生だった。この先生の体罰は、手の甲の指を物差し縁で叩くことだった。些細なことでも叱られては叩かれた。嫌いな先生だった。

2学期に全国学力調査(学テ?)があった。ある朝のホームルームで、先生が「源光は大変頭がいいサー。学力テストの成績が非常によかったそうです」と言った。それをきっかけに教師の態度がそれまでと一変し、周りの生徒、近所の親たちの態度もがらりと変わった。人間不信に陥った。

中学では級長、生徒会長に

中学生になつて間もなく級長の選挙があり、級長にされてしまった。途方に暮れるしかなかった。挨拶の号令や担任や教科の先生との連絡など、どうしてもしなくてはならなかった。村内の中学校の生徒会役員を集めた、青少年赤十字の合宿に参加させられた。否応なしに活動の中心にならなければならず、学校生活が激変した。周りには「友たち」の大きな集団ができた。しかし、教師との距離感が近づくことはなかった。先生方もいわゆる「優等生」たちとは異質に感じていたようだった。

2年生の3学期に生徒会長の選挙があった。担任が

生徒会長候補になれという。

候補者は4学級あつた各クラスの級長だった。他の候補は小学校の頃から級長をしていた「優等生」たちだ。大差で生徒会長に選ばれてしまった。生徒会指導の先生は、親が教師である別の生徒を会長にしたかつたようだった。

沖縄県立読谷高校

学習指導要領の改定によつて、1963年、高校入試が理数科、文科、文理科に区分され、理数科に入った。高校2年の秋に3年生と同じ実力テストが実施され、数学と物理は3年生を退けてトップの成績だった。伯母には大学に進学させる経済力がなかったため、大学に行くには国費留学生になるほか道はなかった。

高校3年の時、世界史の担当が山内徳信先生でした。彼は、後に読谷村長、沖縄県出納長、参議院議員になつた人物だ。世界史の最初の授業の時、人類の歴史は法的に発展してきたという話をした(史的唯物論)。私は、「人間の歴史は偶然的連続で、英雄や優秀な政治家がつくつてきた。クレオパトラの鼻が低かつたら歴史は変わつていたかもしれないというではないか」と意見を言つて、反論した。印象に残る先生でした。

高校の同期生には参議院議員の糸数(旧姓阿嘉) 慶子がいる。

市教組とともに(大学から退職まで)

学生運動に明け暮れた学生時代

1966年4月11日、国費留学生として新潟大学理学部数学科に入学した。沖縄返還運動、ヴェトナム反戦運動、70年安保闘争の中で学生生活を送った。

学生運動に明け暮れ、出席日数が足りず、留年した。4年生の6月、青木清教授から「ゼミの先輩のいるソニーの研究所に行かないか」と勧められ、面接を受けた。内定通知が来たが、10月になって教授に呼ばれ、「私の書いた君の推薦状に虚偽があるとソニーから指摘があった。ひよっとしたら内定が取り消されるかもしれない」と言われた。まもなく内定取り消し通知が来た。青木教授には公私ともに大変お世話になった。

1972年5月15日、沖縄が日本に返還された。就職浪人中の1973年2月、縁あって、新潟市教職員組合の書記に採用された。

市教組時代 — 狂乱物価・賃上げ・ストライキ

中東戦争による石油危機、田中角栄の列島改造で物

価が高騰し、狂乱物価と呼ばれた。総評傘下の労働組合は春闘でストライキ権を行使して賃上げを勝ち取り生活を守った。そんな時代に書記として労働運動に加わった。

新潟県教育界の間

新潟県教育界には「ときわ会」「公孫会」「新陽会」等、いわゆる「学閥」と呼ばれるインフォーマル組織がある。「学閥」は旧師範閥に由来し、百年の歴史を持つ強固な組織だ。戦後、GHQによって軍国主義推進団体と認定され、解体の危機に瀕したが、巧みにそれを逃れた。戦後、師範閥に属さない教員たちが新たに「新陽会」を結成した。

これらの派閥が教職員の人事、県教委と地教委の課長以下、管理主事、指導主事、小中学校の管理職、教職員厚生財団や学校生活協同組合、小教研、中教研の研究団体、教職員組合の県本部、支部の役員、学校の校務分掌の果てまで支配している。「学閥」は封建的な秘密結社で、先輩後輩、上下関係、主従関係で結ばれ、組織の決定に反した行動をすれば、新潟県教育界で生きていくことは極めて困難になる。構成員の主体的・自主的な教育活動、組合活動は不可能だ。国や県

は上意下達の教育行政をすすめるテコとして「学閥」を利用し、県教育界の支配を黙認している。教職員組合も「学閥」の支配下に置かれている。

闘う新潟市教組

1970年代、80年代の新教組のなかで、新潟市教組、三市中蒲支部、北新支部は「学閥」の支配の及ばない自主的な教職員組合運動を展開していた。

新潟市教組は市教委交渉、校長交渉を通して教職員の労働条件改善に取り組み、確認事項として成果を積み重ねてきた。

自主研修権の確保

教育公務員特例法に定める研修権、特に勤務場所を離れた自主研修権の確保に努め、長期休業中は包括的に「動静表」の提出で、課業中は午後4時半以降の自宅研修を確保した。長期休業中についてはいわゆる「日番」の廃止とお盆期間中の学校閉鎖も認めさせた。

校務分掌の民主化

主任制反対闘争の過程で、校務分掌は職員の意向を尊重し、校長が一方的に命じることを禁止させた。また、教務主任をポストとして異動することを阻止するために、異動してきた人を教務主任に命じないように

させた。

不当人事の排除

教職員の異動方針については、市教委に校長会への説明の前に組合へ説明させ、組合員の不当な人事については校長交渉、市教委交渉で撤回させるなどした。

年休、特別休暇への干渉排除

年休や病休、産休、育休、その他各種職専免に対する管理職の不当な干渉については、分会と共に校長交渉を行い是正させ、排除した。

管理職の役員選挙介入排除

管理職による巧妙で陰險な組合役員選挙介入については、不当労働行為として、糾弾し、排除した。ほとんどの場合「学閥」勢力の多数派工作のための介入であった。

市教委との確認事項については「職場活動の手引き」としてピンク色の表紙の冊子にし、全組合員必携にしていた。市教委の管理主事や校長たちも「ピンクパンフ」と呼んで、参考にするとともに、「反するようなことをすれば、市教組執行部が押しかけてくるゾ」と管理職同士警戒していた。

確認事項の多くは、1970年から80年代中頃に

集中しており、当時の執行委員長は中村栄三先生でした。先生からは多くのことを教わりました。わたしが一番尊敬する組合活動家でした。

ウチナンチュとして、そして年金者組合

沖縄修学旅行の事前学習と沖縄県人会

新潟には沖縄県人会があり、多い時で70名近い会員がいました。県人会には沖縄修学旅行の事前学習の講師の要請がありました。私の前の県人会長から、「君が講師になれ」と言われ、数多くの中学、高校で沖縄の紹介に努めてきた。主に平和教育の一環としての事前学習であったため、沖縄戦を中心に話をする。ともに沖縄の歴史文化、地理的条件など60分から90分の講演を行ってきた。延べ67回を数えている。

沖縄ピースツアーと沖縄問題講演

退職後、企画・運営、航空券、ホテルの手配からマイクロバスの運転・ガイドまで全部一人で請け負って沖縄ピースツアーを毎年行っている。これまで11回、参加者138人となっている。

沖縄問題の講演も各種団体から要請があり、2ヶ月に1回程度の頻度で20年近く続けている。

年金違憲訴訟と年金者組合

2012年から全日本年金者組合新潟県本部書記長を務め、現在、年金の連続的な削減は憲法に違反しているとして、国相手に裁判を行っている。全国44都道府県、原告が5千人を超す大型裁判になっている。

新潟県は原告511人、北海道、東京に次ぐ原告数で新潟地裁で裁判を行っている。

新潟の裁判は全国でも特別で、第1次訴訟から第6次訴訟まで、原告を増やしながらかつ続けている。現在第7次訴訟の原告を募っています。12月までには千人の原告を目指している。

(うえち げんこう・新潟市)

